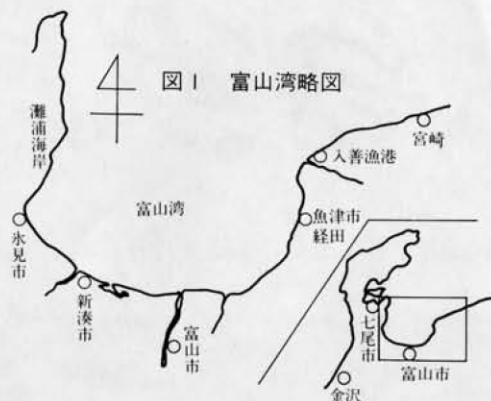


富山湾沿岸の星の和名

富山大学天文同好会和名ゼミナール

井口 雅男・西田 留美



はじめに

つちぼし・つとぼし・こかじぼし——あなたは星の名前という、どの様なものを考えますか。オリオン？アークトゥルス？出てくるのは、ほとんど外国のものです。今使われている星や星座の名前は、ほとんどがアラビア語やギリシア語、ラテン語に由来するものです。つまり、現在私達は西洋の人々が使った星の名を使用しているわけです。

それでは、昔の日本の人々は、星をどの様に見ていたのでしょうか。初めに書いた、三つの名前はすべておうし座のプレアデス星団の日本名、つまり和名です。「星の和名なんか、聞いた事がない」という人も、「すばる」という言葉は、どこかで聞いた事があるのではありませんか。このスバルという名前も、上記の三つと同じ、プレアデス星団の和名なのです。これらの和名を、ちょっと注意して見て下さい。なにか気がつくことはありませんか。実は、上記のうち、三つまでが生活に結びついた道具の名なのです。「つちぼし」は、わらをたたき木槌（きづち）のことですし、「つとぼし」は納豆などを入れるわらづと、「こかじぼし」は、舟の櫂（かじ）のことです。

西洋の星の名を知ることは、応々にしてギリシャやローマの神話を知ることにつながります。神話の神々や英雄の名が数多く星座などに付けられているからです。これに対し、和名に神や英雄の名が出てくることは、あまりありません。昔の日本の人々は、星に農具や漁具の名、あるいは「色

が赤いから、あかぼし」、「三つ並んでいるから、みつぼし」といった、覚え易い、親しみ易い名前をつけたのです。星は、当時の人達にとって、種まきの季節を知らせ、魚の捕れる時刻を知らせ、迷った人や舟に、方角を教えてくれる、生活に無くてはならないものだったのです。ですから、星の和名は、私達の祖先の暮らしや、物の考え方の一端を知る大切な資料なのです。

富山湾沿岸の星の和名

和名は、山村・農村・漁村に、より多く伝わっています。それはそういった地方の人々が気候や風土に合わせ、自然に溶け込んだ生活をしていたからです。私達は富山の和名を採集するにあたって富山湾沿岸地方（図1）の漁師のお年寄りたちに目をつけました。主に氷見・新湊・魚津市経田といった地方を対象とした6年間の調査の結果、漁師生活に密着した次のような和名を採集することができました。

ネノホシ（子の星）

北極星のことです（図2）。⁴²子の方角（昔は北を子といいました）にあるのでこの名前がついたようです。ほとんど位置を変えないため、方角を知るのに大変重要視されました。富山だけでなく全国的にも多い和名です。

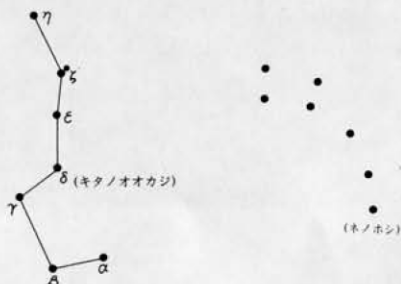


図2 ネノホシ・キタノオオカジ

カジボシ（櫂星）

カジボシと呼ばれるものには、三つのものがあります。ひとつは北斗七星を指す、キタノオオカジ（北の大櫂）です（図2）。この呼び方は西日本に多いようです。

これに対して、ミナミノコカジ(南の小梶)があります(図3)。これは射手座の南斗六星のことです。

三つめは、コカジボシ(小梶星)

と呼ばれるもので(図4)。他の地方では、コカジボシといえば、たいていは小熊座のことを指すようですが、富山のこの地方では、プレアデス星団、つまり、すばるのことを指すようです。これは、全国的にもめずらしいものです。カジボシの類は、星の並び方が舟の梶の形に似ているため、その名前がつけられています。

このほか、ゴカジボシ(五梶星)という名ができました。これは、うかがった話から考えるとミナミノコカジのことだと思われるのですが、あまり確かではありません。

図4 コカジボシ・ヒバリ
ヒバリ(ヒバル)

おうし座のプレアデス星団のことです(図4参照)。どうやら「すばる」がなまって「ひばる」となり、星空高く昇るため、鳥の雲雀(ひばり)の意に転化したものと思われます。

ツリガネボシ〔ツルガネボシ〕(釣り鐘星)

おうし座のヒアデス星団を、釣り鐘にみたてた名前です(図5)。また、この星団の中にある1等星のアルデバランを、色が赤いのでアカボシと呼んでいたそうです。ツルガネボシは6月頃夜明けに昇り、冬至の夜明けには、西の山にかかるといいます。中部地方に多い名前です。

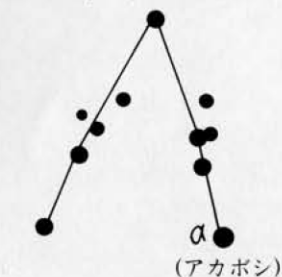


図5 ツリガネボシ・アカボシ

ミツボシ(三つ星)

地域によって、カラツキボシ・サントイボシ(氷見、新湊)、カラツキサントイ・サントウダテ(氷見)、サントウノボシ(新湊)、サンコウボシ(新湊、入善)とも呼ばれています。これはオリオン座の三つ並んだ星のことです(図6)。

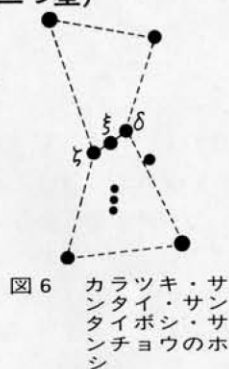


図6 カラツキ・サントイ・サントウダテのボシ

「カラツキ」という仏様が三体、空に並んですわっているところなので、カラツキサントイなどと呼び、また、昇る時に三つの星が、縦に並ぶので、サントウダテと言うのだそうです。

この星達は、土用の一日目の日の出に一番目の星、二日目に二番目の星、三日目に三番目、といった具合に、順番に昇ってくるということです。蛇足ですが、漁師たちの宴会などでは、頭のはげた人を三人見つけると、「あんたら、あっち行って三光さんみたいに並んどられ」などと言っては、座をなごませたのだそうです。

アオボシ(青星)

おおいぬ座のα星、シリウスのことです(図7)。シリウスは全天で一番明るい星で、その青白い輝きから、この名がつけられたようです。

フタツボシ(二つ星)

これは、おおいぬ座のδ・ε星のことのようです。アオボシの後、約1時間後に、水平に並んで昇ります。(図7)。

他の地方では、η星も入れて、三角形の形で名前をつける所が多いようですが、富山湾では、もやが多いためか、明るいδ・ε星だけが目についたようです。

フタツボシが夜明けの空に現れるのは、初秋の、暑さも少ししのぎ易くなる頃です。

以上の、ヒバリからフタツボシまでは、漁の役星(漁に役にたつ星、という意味だと思われます)。

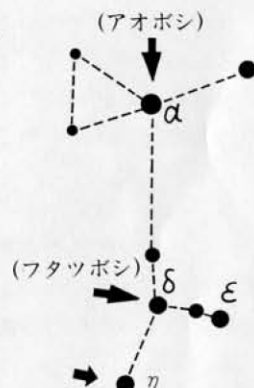


図7 アオボシ・フタツボシ

で、これらの星が昇るときに、魚が良く捕れるということです。また、これらの星は、時計としても使われていました(図8)。具体的に言いますと、ヒバリが出てから、アカボシが出るまでの時間は、約1時間。アカボシからカラツキまでの時間は、約2時間。カラツキからアオボシまでが、約2時間。アオボシからフタツボシまでが、約1時間。といった具合になっているのだそうです。これは覚えておくとも便利かもしれません。

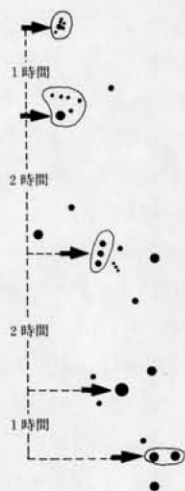


図8 魚の役星
上から
コカジボシ、アカボシ、
カラツキ、アオボシ、
フタツボシ

オオボシ(大星)

金星のことです。この他に、アケノミョージョー(明の明星)、ヨイノミョージョー(宵の明星)などとも呼ばれていましたが、昔は、オオボシと呼ぶのが一般的だったそうです。

その他

昔の人は、アオボシのあとに、イツツボシ(五つ星)が昇ってくる、と言っていたそうですが、明治ごろから使われなくなり、現在では、どの星のことを言うのか不明です。他に、ヨナカノホシ(夜中星)というものがあり、木星のことではないかと思われるのですが、確認がとれませんでした。また、現在調査中の、魚津市経田地方で、葉書によるアンケート調査の結果、「北斗七星のことを大陽星、その内側にまわっているのが小ゆう星」という返事をいただきました。これは、このあと調査を進めていきたいと思っています。

星に関する言い伝えなど

以上の星に関することを調べていた際に、時々「どこまで本当なのかはわからないが」というお話も、いくつか聞くことができました。

まず、チカボシ(近星)です。これは、人によって見方が違っていて、他の星よりも、自分の方に近づいて見える星のことである、という人と、月の近く(手をのばして、指3本ぐらい。約6°

以内)にきた星のことである、という人がいました。いずれにしろ、チカボシは、2~3日後に天候が崩れ、しけになる前兆だと言います。これとは逆に、月から少し離れて、きれいな星が出た場合は、好天が続く兆しだということです。

日食・月食についても、いろいろ言い伝えがあります。月食は、人間の悩みを、月が代わって病んでくださるのだ、と言い、たらいに水をはり、月を水にうつして拝んでいたのだそうです。一方、日食は、天変地異の前ぶれであると言って、恐れられたそうです。

その他、金星は、おしゃか様がこの星を見て、悟りをひらいたおめでたい星なのだそうです。

主な和名の説明はこれで終わりですが、これら富山湾沿岸の星の和名を知る上で、どうしても知っておかねばならないのが漁師たちの生活です。そこで、これから少しだけ当時の生活についてお話ししたいと思います。

漁と星

明治、大正時代の富山湾での漁法は、主として定置網という方法でした。季節は、春網(1~4月)、夏網(4~7月)、秋冬網(9~翌年1月)の三季網のほか、夏網と秋網の間の40日網をいれて計四季です。主な漁期は秋冬網の9~11月にかけてで、カツオ・フクラギ・イカを採っていたそうです。当時は網の目が粗かったので、魚が逃げ易く、そのため、魚群が網に入るのを見ては、一生懸命網をたぐったようです。魚は、晩と明け方に良く動くため、その時刻に合わせて漁をし、晩の漁が済むと、舟をつないで、のま(とま)の中で眠っていました。しかし、明け方の漁があるので、いつまでも眠ってはいられず、星の出で時刻を判断して起きていたそうです。

このように、漁師達の生活にとって星は欠かせぬ必需品だったようです。表1は、図1の漁港から採集した星の和名をまとめたものです。入善は丸山卓哉氏の調査、宮崎のものは、文献より集めたものです。入善、宮崎のものは、まだ調査が不十分なのですが、これを見ると、ネノホシ、カジボシ、及びコカジボシからフタツボシに至る一連の星が、富山湾で共通して使われており、また、土地によって、さまざまな方言が使われているこ

収集地 主な星名	氷見市 瀬浦海岸	新 湊	魚津市 経田漁港	入 善	宮 崎
「ネノホシ」 北 極 星	○	○	○		○ 星
「カジボシ」 北斗七星	○ 「ネタノカジボシ」	○	○		○ 星 (カヅボシ)
「ミナミノ カジボシ」 南斗六星	○				
「コカジボシ」 プレアデス星団	○	(ヒバリ)	(ヒバリ) (スバルサマ)		(シバルノ ホツサマ) 星
「ツリガネボシ」 ヒアデス星団	○	○			
「アカボシ」 α Tau	○	○	○		
「ミツボシ」 δ, ε, ζ, Oii	○ (カラツキボシ) (サンタイボシ)	(カラツキボシ) (サンタイボシ) (サンコウボシ)	○	(サンコウボシ)	○ 星
「アオボシ」 α, CMa	○	○	○	○	
「フタツボシ」 δ, ε, CMa		○	○		
「オオボシ」 金 星	○	○	○	(377ノリョーゾー) (77ノリョーゾー) (37ノリョーゾー)	○ 星

表1 富山湾の主な和名

- ・() 内は、その地方の和名を示す。
- ・印は、内田武志著「星の方言と民俗」より抜粋
- ・入善は丸山卓哉氏の調査によるもの
- ・○印は、左端の和名が収集されたことを示す。

とがわかります。この三つのグループの星は、それぞれ別の目的で使われていたようです。

(1) ネノホシは、方角を知り、舟の進行方向を決めるために使われました。

(2) カジボシは、日周運動で星が動くのを利用して、時間の経過を知るのに使われました(図9)

(3) コカジボシ→ツリガネボシ(アカボシ)→ミツボシ→アオボシ→フタツボシという星の連なりは、役星ともいい、前章でも書いたように星と星との間隔が似ていることから(図8)、これらの星の出る時を見はからって、網を引き上げるのに使ったそうです。また漁師さん達は魚市場で他の漁場の人と会う時に、どの星の出の時に魚が採れたか話し合っ、魚群の動きが、何時頃どこを通過、その後、どこへ移動したか知るのだとい

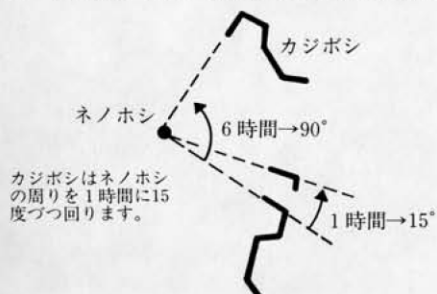


図9 カジボシの動き

うことでした。このような交流によって、星の和名が富山湾で共通に使われるようになったのだと思われます。このような交流の、別の例として、ミナミノカジボシの分布があります。この名は、能登・七尾の漁師達が使っていた名前ですが、富山湾では、氷見だけにしか見つかっていません。このことは、富山湾とは別に、氷見の漁師と能登の漁師との間の交流があったことを示しているのかも知れません。

お わ り に

魚は、晩と明け方によく動きます。このため、夜間の漁が多くなり、漁師は星に頼って生計を立てていました。今でも、富山湾岸には、さまざまな星の和名、言い伝えが残っています。漁師達が語り伝えてきた星々の豊富さ、正確さから、彼らがいかに星を大切にしてきたかが理解できるでしょう。

富山だけでなく、星が日本中の山村・農村・漁村の生活に結びつき、それぞれ、独特の見方と名前を今に伝え、また時には、素朴な興味深い言い伝えを伴っているという事は、とても素晴らしいことです。

しかし悲しいかな、現在の天文学では、星の和名は使用されていません。星を見、漁をした時代も過去のこととなりました。このまま、あと数十年もすれば、星と生きた人々と共に、和名は忘れ去られていくでしょう。

今では星の和名や言い伝えを知っている人、語ってくれる人が大変少なくなっています。役目を終えたとはいえ、和名や言い伝えは、このまま忘れ去るには、あまりにも惜しい物たちです。私達は、今後も和名の収集、保存活動を進めていき、これら祖先が残してくれた遺産を守り続けて行きたいと思います。

最後に、この調査の為にアンケート、訪問調査などで御協力下さった、氷見・新湊・経田の方々、さまざまな助言を下された富山県天文学会の増田正之さん、OBの笹倉嘉人さん、データを提供して下さい丸山卓哉さん及び原稿依頼をして下さった科学文化センターにお礼を申し上げます。

(いぐち まさお・にしだ るみ)
富山大学天文同好会